



**Data**

監督・脚本・編集：井上雅貴  
 原作：田中和彦『～松山ロシア人捕虜収容所外伝～ソローキンの見た桜』  
 原案：青山淳平『松山ロシア物語』  
 出演：阿部純子／ロデオン・ガリュ  
 チェンコ／山本陽子／アレクサンドル・ドモガロフ／六平直政／斎藤工／イッセー尾形／海老瀬はな／戒田節子／的場司／山本修夢／藤野詩音／宇田恵菜

## 👁️👁️ みどころ

私の故郷・松山は司馬遼太郎の小説『坂の上の雲』で有名だが、ロシア兵墓地を知っている人は少ないし、「旅順開城約成りて、敵の將軍ステッセル」で始まる「水師營の歌」を知っている人は、さらに少ないはず。そんな松山のロシア兵捕虜収容所を舞台とした、壮大なロミオとジュリエットの物語が登場！

日清戦争の勝利後、懸命に“一等国”を目指した日本（大日本帝国）は、ハーグ条約（1899年）が定める、捕虜に対し「博愛の心を以て之を取扱ふ」ことに懸命。そのため、松山の捕虜収容所では・・・？

新入りのソローキンはホントに捕虜？それとも・・・？そんな謎を含みながら展開する、ロシア人将校と日本人看護婦との恋物語は興味深い。『坂の上の雲』で見た日本人将校・広瀬武夫とロシア人令嬢との恋は実らなかったが、さて本作では？

ラストのあっと驚く“脱出劇”を見守り、かつ五木ひろしの名曲“契り”の歌詞を考えながら、今を生きるヒロインの“ルーツ”をしっかりと考えたい。



## ■□■松山の“ロシア兵墓地”が映画に！こりゃ必見！■□■

愛媛県松山市で昭和24年に生まれた私は、高3の1967年まで松山で過ごしたが、小学・中学時代は自転車道後温泉に通うと共に、年に1、2度お墓参りに行った時は時々ロシア兵墓地も見学していた。その時は、父親からロシア兵墓地にまつわるさまざまな話を聞かされ、また「旅順開城約成りて、敵の將軍ステッセル」という歌詞で始まる「水師營の歌」を自然に覚えさせられたが、自分から特にロシア兵墓地に興味を持つことはなか

った。しかし、大学時代に松山に戻り、司馬遼太郎の『坂上の雲』を読むと、日露戦争に対する興味と共にロシア人墓地に対する興味も沸き、日露戦争当時の日本人の心のあり方にも興味を覚えたものだ。

そんな松山での生活から約50年後の今、全国ではじめて松山に作られたロシア人墓地を舞台とする“史実に基づく日露戦争時代のロミオとジュリエット”が日露合作映画として作られ、松山から発信したとなると、そりゃ必見！1966年頃からは墓地の近くにある勝山中学校の生徒たちが墓地の清掃活動を行っていたが、1984年からは生徒会の呼びかけで毎月清掃活動を行っているようで、本作の冒頭にはそのシーンが登場する。そんな活動に参加している生徒たちも、そのお墓にまつわるこんな話があったことを知れば、あっと驚くだろう。

本作の原作は田中和彦の「～松山ロシア人捕虜収容所外伝～ソローキンの見た桜」、そして原案は青山淳平の「松山ロシア物語」だが、2009年11月29日から2011年12月25日まで足掛け3年に亘ってNHKスペシャルドラマとして放映されたTVドラマ『坂上の雲』に続いて、松山から発信された本作が全国に広がれば、そりゃすばらしい。2016年2月には父親が102歳で死亡したため、今は松山に拠点がなくなってしまった私だが、松山出身、そして小中学校時代ロシア人墓地に何度も行っていたというだけで、本作は必見！

## ■松山のロシア兵墓地を取材していると・・・■

本作でジュリエット役を演じるのは、『孤狼の血』（18年）（『シネマ42』33頁）に出演していた阿部純子だが、本作では二役を演じている。冒頭に登場するのは、松山のロシア兵墓地に強烈な関心を示す先輩ディレクター倉田史郎（斎藤工）の指示で故郷松山に戻ってきた駆け出しのTVディレクター高宮桜子（阿部純子）。倉田の指示通り動いているが、桜子の興味と関心はイマイチのようだ。しかし、祖母高宮菊枝（山本陽子）から、その母親である武田ゆい（阿部純子）の日記を見せられ、その中で、ロシア兵将校ソローキンと日本人看護婦ゆいとの接点が見えてくると・・・？

ひょっとして、私のルーツはロシアに・・・？まさかそんなことはないだろうが、スクリーン上は突然2018年の現代から1904～5年の日露戦争の時代にさかのぼることに・・・。

## ■捕虜収容所の風景に注目！そこに新たな捕虜が！■

松山市内のある寺は今ロシア人捕虜の将校用の収容所にされており、そのリーダーはボイスマン大佐（アレクサンドル・ドモガロフ）だ。中国の大連旅行で私が二度も見学した二〇三高地における激戦は1904年11月28日～12月5日だが、スクリーン上では既にこの寺に数十名のロシア兵捕虜が収容されていた。その警備はごくわずか。また木の

柱と紙の障子と畳で建てられたお寺は、火事を起こすには絶好の建物だ。捕虜収容所がこんなお寺でホントに大丈夫なの？

この捕虜収容所の所長は河野（イツセイ尾形）。当時の日本は、“一等国”になるために、ハーグ条約（1899年）に定められた、捕虜に対し「博愛の心を以て之を取扱ふ」ことを懸命に遵守しようとしていたが、彼はまさにその象徴だ。つまり、彼はハーグ条約を遵守する捕虜収容所の良きモデルにするため、日夜苦心していたわけだ。しかし、スクリーン上でみる限り、ことあるごとに河野所長とボイスマン大佐の価値観は対立し、いつも「ロシア人は・・・」「日本人は・・・」とモノ別れはになっていたから、事態はそう簡単ではない。

そんな時代状況下、スクリーン上は浜辺の風景が広がるが、ここは私もよく知っている堀江の海水浴場らしい。そこでは新たな捕虜が船から降りてきており、その中に本作のロミオ役となるソローキン（ロデオン・ガリュチェンコ）がいた。もっとも、彼は陸軍ではなく海軍将校らしい。捕虜収容所の中にはそんなソローキンが新たに入ってきたが、彼は一体どこで何をしていて捕虜になったの？

## ■□■帝政ロシアの行方は？革命の情報は？この男の任務は？■□■

『坂の上の雲』でも、駐在武官としてロシアに渡った秋山真之の親友・広瀬武夫が、ロシアの海軍大佐コバリスキーの娘、アリアズナとの間で繰り広げるロミオとジュリエットのような恋愛劇が大いに興味をよんだ。しかし、広瀬の任務は「敵の敵は味方」の格言通り、日露戦争を有利に進め、帝政ロシアを倒すためにロシア革命を支援することだった。したがって広瀬には恋愛劇にうつつを抜かす余裕は本来なかったが、さてソローキンの場合は？彼の任務は一体ナニ？

デビット・リン監督の名作『戦場にかける橋』（57年）でも、スティーブ・マックイン等オールスターが大活躍した名作『大脱走』（63年）でも、捕虜たちの情報交換のシーンがストーリーの進行上大きな役割を果たしていたが、それは捕虜とされつつも常に脱走を考えていたためだ。しかし、どうもソローキンは戦いの中で傷ついて捕虜にされたのではなく、どさくさに紛れて自ら捕虜になり、松山の捕虜収容所に入っているらしい。そう、彼の任務も明石と同じで、ロシア革命を支持している数少ないロシア人将校である彼はロシア革命派を支持し、帝政ロシアを倒すための情報を集め、さらに日本政府に革命派への支援をとりつける極秘任務のために、捕虜となってここに来ているわけだ。

典型的な帝政ロシアの軍人であるボイスマン大佐は、ソローキンがそんな革命分子であることを理解したようだが、あえてその当否を聞かないところはさすがだ。しかし、なぜそんなソローキンと、松山市内の伝統あるろうそく店の娘であるゆいの中に、ロミオとジュリエットの物語が生まれたの？

## ■□■ゆいはなぜ看護婦に？捕虜と看護婦の恋の行方は？■□■

明治時代の先進的な女性のあこがれは、『君、死にたまふことなかれ』と歌った与謝野晶子。本作にもそんな与謝野晶子ファンの女性が登場するが、ゆいは格別与謝野晶子ファンでもないし、先進的な思想の持ち主でもない。また、出征した弟は既に戦死し、兄の武田健一郎（的場司）は右足を失って、父親武田勇吉（六平直政）の経営するろうそく店に戻っていた。そんな状況下、松山市内で代々のろうそく屋を営んできた父親は、ゆいが家の資金援助もしてくれる、この上なき良縁に恵まれたことを感謝していた。そのため、ゆいがロシア兵たちの看護婦の募集に応じたことを聞くと大激怒したのは当然だ。

ゆいが看護婦に応募したのは、顔も知らない相手の家に親の言うまま嫁ぐことへの虚無感からだったが、看護婦になってソローキンたちの看護をしていると、何かと新鮮。捕虜とはいえ、ソローキンはれっきとしたロシアの教養を身につけた将校だから礼儀正しい上、女性を尊重する姿勢も日本人の男たちとは大違いだった。互いの生まれ、境遇、互いの国の良さ等を話しているうちに、いつの間にか2人は……。しかし、私の弟はこの人の国の軍隊に殺されたし、私の兄も大ケガをさせられたもの。私が看護婦になってここで働いているのは、あくまで日本がハーグ条約を守って一流国になるため。決してソローキンのためではない。ましてや、ソローキンに対する愛情からではない。ゆいは何度も自分にそう言い聞かせていたものの、2人の間でいろいろな出来事が重なってくると……。

去る3月21日に見た、ネメシユ・ラースロー監督の『サンセット』（18年）は、クソ難しい映画だったが、本作は単純でわかりやすい。そんな描き方（作り方）の是非や好き嫌い人は人それぞれだが、本作中盤ではそんな時代の日露のロミオとジュリエットをしっかりと楽しみたい。しかして、広瀬大佐には次の任務によるアリアズナとの別離が待っていたが、本作におけるソローキンとゆいの恋の行方は？

## ■□■松山の桜をホントに見たの？捕虜の交換は？■□■

大阪城の桜も美しいが、私の故郷松山には松山城がある。松山城は、“城山”の頂上にあるからロープウェイか徒歩で登っていかなければならないが、山頂の桜はそりゃ美しい。私が再開発の事件で長い間通った岡山県津山市の津山城跡の桜も美事だったが、それに負けず劣らず美しい。ロシアに桜の花はないが、捕虜の立場とはいえ、はじめて日本にやって来たソローキンが、外出を許された時に見た松山城の桜はさぞ美しかっただろう。しかし、ロシア革命と帝政ロシアの情報収集と、ゆいとこの恋の両方に忙しいソローキンが、そんなにゆっくり桜の美しさを愛でる時間的・精神的余裕はあったの？そう思いながら見ていると、どうやらソローキンが捕虜として日本に滞在した間に桜を鑑賞する時期はなかったらしい。したがって、どうも本作のタイトルとされている『ソローキンの見た桜』とは、本物の桜ではなく、桜の花のように美しいゆいのことだったようだ。

それはともかく、今ソローキンの下には、旅順陥落のささやかなお祝いとして、日露間で捕虜となっている将校の交換がされるらしい、との情報が入り、ソローキンがその一員になるらしい。時はまさにタイムリーだ。それに向けて、ソローキンは日本政府にロシア革命派への支援要請を強め、自身もロシアに戻って革命軍を指揮しなければ……。いや待てよ、それはそれで結構だが、そうなるとゆいとの恋の行方はどうなるの……？

ここでのソローキンの決断は、ゆいに正式に結婚を求め共にロシアに戻ることであった。ゆいには親が決めた結婚相手がいたものの、ゆいはその男を見たこともないのだからそんな話は蹴ってしまえばいい。たしかにソローキンの価値観ではそうかもしれないが、ゆいの方は……。ゆいの心の揺れと最後の決断は、あなた自身の目でしっかり確認してもらいたいが、本作ラストのクライマックスは、示し合わせた芝居小屋からの二人の脱出劇になるので、それに注目！

## ■□■任務も恋も？そりゃ欲張りすぎ……。？■□■

ソローキンが脱出を決断したのは、捕虜交換の交渉が暗礁に乗り上げたため。しかし、いくら警備が緩やかで待遇の良い捕虜収容所でも、そこからの脱出は難しいのでは……。？ 2018年4月には、塀の無い刑務所として有名な松山刑務所から脱走した平尾龍磨受刑者が、広島県尾道市の向島等に潜伏しながら20日以上もの逃走を続けた結果、広島県南区の路上で逮捕される事件が話題になったが、それと同じように、ソローキンがゆいを連れて脱出することなど到底不可能なのは、……。？

本作ではそんなラストの脱出劇に注目だが、この脱出劇のシナリオが実現したのは、ある人物からのたつてのお願いがあったためらしいから、とりわけ、そのカラクリに注目！ さらに芝居小屋から手に手を取って脱出しようとする二人の目の前を遮ったのは、ゆいの兄の健一郎だったが、なぜ健一郎は二人の脱出を黙認したの？ロミオとジュリエットの場合は、恋の脱出行はちょっとしたミスと誤解によって大きな悲劇になってしまった。また、広瀬武夫は、新しい任務のため泣く泣く恋人のアリアズナと別れざるを得なくなってしまった。しかし、ソローキンの場合は、仲間たちが作った脱出のシナリオに沿って、無事ゆいを連れて松山を脱出し、神戸を経由してロシアに戻るの？そして、任務も恋も成就させるの？それはあまりにも欲張りすぎでは……。？

## ■□■脱出の成否は？神戸での“契り”は？■□■

かつて日活の青春スター（女優）だった浅丘ルリ子は今やすっかりおばあさんになり、天下の吉永小百合もさすがに歳は隠せなくなった。また、和泉雅子はずっと前に探検家になって芸能界を引退したが、松原千恵子は今もあまり変わらない姿で時々テレビに登場している。しかし、彼女たちより少し遅いデビューで本作に特別出演している山本陽子は？

日露戦争当時も、神戸は長崎とともに中国やロシアに渡る港として、重要な役割を担っ

ていた。そのため、松山の捕虜収容所を脱出したソローキンとゆいの当面の滞在先は神戸とされたから、2人がそこにたどり着くことができれば、その後のルートはかかなり安心だ。

舛田利雄監督の『二百三高地』(80年)とTVドラマの『二百三高地』(81年)では、さだまさしが歌った主題歌「防人の詩」が大ヒットした。また、同監督の『大日本帝国』(82年)では、五木ひろしが歌った主題歌「契り」が大ヒットした。1980年代のバブル真っ盛りの頃、さすがにカラオケで「防人の詩」を歌う人は少なかったが、のど自慢のごく一部の人は時々難曲「契り」に挑戦したものだ。「あなたは誰と契りますか？」の問いかけから始まる同曲の解釈は難しいが、少なくともそこに男女が肉体関係を持つことという意味が含まれていることは間違いない。平常時ならそれは基本的に自由だが、日露戦争下の日本ではそんな自由はなかったはず。ましてや、いくら自由度が高いとはいえ、捕虜収容所の中でのロシア人捕虜と看護婦の間でそんなことは不可能だったはずだ。

しかし、脱出に成功し、無事神戸にたどり着いた2人ならそこで“契り”を交わすことも可能に・・・？

## ■□■ゆいの結婚は？桜子のルーツは？ちょっと出来すぎ！■□■

ソローキンの脱出行については、わざと追手を引きつけて犠牲になる仲間の将校たちを登場させて、それなりのハラハラドキドキ感を演出しているが、何といても最大のポイントは、“ある人物が、頭を下げてある頼みをしたこと”。しかし、それは、一体ナニ？

『キネマ旬報』2019年4月上旬号の「REVIEW 日本映画&外国映画」で、評論家の吉田伊知郎氏は、「捕虜収容所ものとして正面からドラマを作ることが出来る材料が揃っているだけに、終盤の怒涛の展開がモノローグで処理されてしまうのは拍子抜け。」と書いている。まさにそのとおりで、これだけのネタがあれば、それをもっと大展開できたのではと思われる。

本作中盤には、旧松山藩主家の当主であった久松定謨(さだこと)が建てた立派な洋館である萬翠荘(ばんすいそう)が登場し、そこを舞台として「夜交の夕べ」が開催される。ゆいは結婚相手と定められている男性とそこではじめて出会うのだが、本作ではその男性が徹底的に“いい人”に設定されているところがミソだ。常識的に考えれば、結婚相手が花嫁修業をはじめるのならともかく、急にロシア兵捕虜収容所で看護婦をすと聞けば、「それはダメ」というはず。また、看護婦のゆいがロシア人将校と付き合っているらしい、といううわさが少しでも耳に入れば、そのロシア人将校に圧力をかけるのが普通だ。しかし彼の場合はどうも、“ある人”が頭を下げて“ある頼み”をしてきたことを承諾したらしい。なるほど、なるほど。その結果、あの脱出行の筋書きに・・・？もっとも、彼にとっても2人が神戸に滞在した中でハネムーンのような日々を過ごしたのは想定外だったはずだ。したがって、その時の「契り」で、ゆいが妊娠したことがわかれば、即“結婚は破談”となったはずだ。

本作でラストに山本陽子扮する桜子の祖母がはじめて打ち明ける驚愕の真相とは？すると、桜子のルーツは？いくら何でも、そりゃちょっと出来すぎ！そう思ってしまうが、まあハッピーエンドの映画にまとめるには、これがベストかも。

2019（平成31）年4月5日記